

# 草庵仏教

第208号  
(発行日)

2007年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と

12日。午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 心弱き者の仏法

貧乏や病気や事業の失敗や人間関係がぎくしゃくするなどの不都合なことをどうするか。そういう時に、対策や工夫によつて不都合な状況を都合のいい状態に変えていこうとする、そういう方法での解決を求めることは誰しもがおこなう方法である。政治・経済や医学などの対策などはその典型である。

一方、右のような対策によつて、外の状態を変ええる方法は適宜に用いるにしても、それだけでは人間の問題の根本的な解決にはならないことを自覚し、不都合な状況に「困る」自己自身を問題にする。そういう困る自分を問題にして、そこに真実を求め、困った状態においても、なお「救い(自由)」を見出す道として仏法があるのであろう。真宗もそういう道であるといえよう。

\*  
ただ、「死や病気や貧乏や事業の失敗や人間関係がぎくしゃくする」などの不都合な状

況にぶつかったとき、「そういう状況を自分に引き受ける」のが真宗の道であるのかのように語られることがある。我が身に降りかかってくるいろいろなマイナスの出来事を我が身の事実として引き受け、あるいははになう道が、はたして真宗であろうか。

なるほど、それは尊い態度であるが、なかなか私どもはそういう道にはついて行けない場合が多い。良寛和尚が「災難の時は災難に遭えばよろしく候。死ぬ時は死ねばよろしく候」というようなお手紙を書かれていると聞いたことがある。火事になつてしまつたら、火事に遭えばよろしく、病気になるれば病気にあえばよい。すなわち出てきた事実を引き受けていけばよい。逃げようとするから苦しむのである。不都合なことを逃げずに、降りかかってくる事実をそのまま受け取ればよい。そういうお言葉であろう。

こういう良寛和尚の仰せら

れる道はよく分かるし、尊い道だと思ふ。ただそれはやはり人生の達人の生き方ではなからうか。尊い生き方であるが、なかなかそうはいかないのが凡夫である。

\*  
なぜそうはいかないのか。それは「私」とは自我心そのものであり、自我心は、いつでも自分に都合の良いことは受け入れるけれども、都合の悪いことは受け入れることが非常にいやなのである。だから病気になる、「なんでこんな病気になるのか」と愚痴をこぼす。お金に困れば頭を抱えて落ち込んでしまう。人から過ちを批判されたら、へその通りです」と受け取らずに批判する相手を責めることで自分を慰めようとす。そういうように災難や自分に不都合なことが起こると、それから逃げたくなる。それが自我心の固まりである「私」の姿である。良寛和尚のような賢者にはとうていなれないのである。

\*  
そういう、不幸を引き受けるところか逃げようとするしかならない私に、阿弥陀様は「汝の今の状況を引き受けよ」と

はおつしやらない。「苦しいまま、困つたまま、念仏申せ」と仰せになり、南無阿弥陀仏と現れて下さり、「汝がどんな状態になろうとも私がついてい、私が引き受ける。苦しいであろうがそのまま念仏申せ」と仰せ下さるのである。「我が名を称えよ」と仰せ下さるのである。引き受けるのは(私)ではなくて、引き受けられない私を阿弥陀様が引き受けて下さるのであった。

阿弥陀様が、腰抜けのたよらない私と共にいて下さり、私が動転し、ふらふらでも、私と離れずに、私に「ナムアミダブツ」と現れ、「ここにいますぞ、助けるぞ」と大悲を寄せて下さるのである。

この大悲の心に打たれて、大悲の心が流れて下さると、不思議なことに、不都合な現実、やっかいな現実は何とか耐えさせていただく力が与えられてくるようである。もちろん愚痴やくよくよの心が起こらないというのではない。そういう煩惱は起これども、煩惱を煩惱と知らせて下さり、また「そんなお前だから」と寄り添いたもう阿弥陀仏の大悲をよるこばせていただくのである。(了)

ただこののである。(了)

# 真宗問答(二二十九)

## 二 誓偈に学ぶ(一)

「我、超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、

この願満足せずは、誓う、正覚を成らじ。

我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ」

『仏説無量寿經』より

(現代語訳) わたしは世にすぐれた願をたてた。必ずこの上ないさとりを得よう。この願を果たしとげないようなら、誓って仏にはならない。わたしは限りなくいつまでも、大いなる恵みの主となり、力もなく苦しんでいるものを広く救うことができないうようなら、誓って仏にはならない。

\*

A 「今回は仏説無量寿經の三誓偈という偈文の最初の部分についてお話し下さい」  
D 「この偈文のこの部分は法蔵菩薩が四十八通りの願を建てて、さらに重ねて誓われた

しは自分たちの生存と環境を安定したいというのが、世の中の人が願っていることではないでしょうか」

D 「私たちの具体的な願いというのは、こういうものですね」

A 「政治とか経済とか科学技術などもこうした事柄を実現しようとするのですね」

D 「政治・経済や科学の目指すものも、個人の願うものと離れたものではなく、経済的な豊かさや生存の安全や病気を治すことや個人の能力を高めたりすることなどですからね」

A 「なぜ、法蔵菩薩はこの世の人々の願いを超えた願いを建てられたのでしょうか」

\*

D 「それは私の思い及ぶことではありませんが、この世は無常な世であり無常な人生であり、動乱して止まない世であり動乱して止まない人生であること、いわゆる諸行無常の世であることを知り抜いて建てられたのが法蔵菩薩の本願ではないでしょうか」

A 「この世と人生生活は無常であり、動乱するものである、と見ておられるのですね」

D 「ええそう何うのです。たとえば長寿を願えども、ついには寿命は終わるのであります。経済的豊かさも経済の変動に上下して安定せず、いつまでも生活不安は絶えない。健康は願えどもついには治らぬ身になってしまいます。人間関係がよい状態であつても、事が起これば、対立し争う関係にいつでも変わる、いわば昨日の友は今日の敵となる。安定しないものです。この世の平和も、常に戦争や紛争や内紛やテロにさらされま

すし、原発の事故はいつおこるかも知れず、やっと豊かな生活が出来ると思えば、自然環境の悪化に悩まされます」

A 「この世もこの人生もヤレヤレというときはありませんね。まだ日本は恵まれた国ですが、それでも動乱せる無常の世の中という本質は変わらないのですね」

D 「ええ、またたとえ平和で豊かな社会になったとしても、私そのものが、いつまでもこの世におれません。老病死の無常の身を抱えている限り、この世の春を謳歌しても、ただしばらくの間です。満月はすぐかげってしまいます。だから、阿弥陀仏の願いは、

この世と人生の中で安定した状態を作りだす道ではなくて、動乱転変する世を生きる一人一人に、**汝を撰取して捨てず、かならず浄土に生まれさせよう**と、今この私たちに働きかけてくださるのです」

A 「阿弥陀仏の願はこの世の願いを超えているというのは、阿弥陀仏の願いはこの世のさまざま問題を直接に解決していこうとされるのではないのですね」

D 「そうお聞かせいたただいています。動乱転変するこの世と人生を直接救うというのが阿弥陀仏の救いではなくて、そういう無常転変する**世と人生から救うていく**、それが阿弥陀仏の救いであり、またそれによって、この世の諸問題に善処していく力や勇気を与えてくださるのであります」

\*

A 「この世と人生の問題を直接救うのが阿弥陀仏の救いではないというのは、たとえば長生きをさせるとか、病気や貧乏にならないようにするとか、夫婦や親子の仲をよくするとか、地域格差をなくすとか、公害問題を解決するとか、

戦争のない世界にするとか、  
そういったさまざま諸問題  
を直接に解決するのが真宗の  
教えではないのですね」

D 「そうです。そういう問題  
が起こって止まない（この世  
と人生から救う）のが南無阿  
弥陀仏の仏法なのです。もし  
てそれによってむしろ、様々  
な人生上の諸問題に、できる  
だけ善くいくようにと善処し  
ようとす意欲を、その人に  
与えようとするのが仏法なの  
ではないでしょうか」

\*  
A 「ではどのようにしてこの  
世から救うて下さるのです  
か」

D 「動乱せる世と人生に、動  
乱しない働きである阿弥陀仏  
の本願力を示し、一人一人に  
（よりかかれ、よりのため）  
と働きかけて下さるのです」

A 「その本願力は動乱もしな  
いし、無常でもない働きのな  
いですね」

D 「ええ、阿弥陀仏は光明無  
量・寿命無量の働きです。こ  
の世の無常転変を超えていま  
す」

A 「そうすると、阿弥陀仏は  
この世を超えておりながら、  
無常の世に生きる衆生に、ま  
ことの拠り処となるべく働き

かけて下さるのですね」

D 「ええそうなんです、阿弥  
陀仏は常住の真実であり、無  
量寿のはたらき、いわば永遠  
無限なるまこととす。その永  
遠のまことが、私たちの変わ  
ることなきより処として今こ  
こに現れ、私たちにそれを知  
らせて下さるのが、南無阿弥  
陀仏の名のりなのです」

A 「変わりずめの世と人生を  
生きる私たちに、変わることに  
ないまこと（真実）の働き  
にあずからしめようとされる  
のですね」

D 「ええそういうまことであ  
る阿弥陀仏が私を摂め取って  
捨てない、そういう恵みを私  
たちはいただくのです。そう  
すると、老病死の無常な人生  
にあつて、無常でない阿弥陀  
仏の中にある自分を知り、動  
乱せる不安な世の中にあつ  
て、阿弥陀仏は私と共に常に  
いてくださるとお知らせをこ  
うむり、不安な人生のただ中  
にあつて生きる力となつて下  
さるのです」

\*

A 「それと、超世の願には諸  
仏の願いに超えた広大な願と  
いう意味があるといわれてい  
ますね。では諸仏の願いと  
どのような願いですか」

D 「もろもろの仏は、衆生を  
救おうという願をもつておら  
れます。衆生を仏法に入れ、  
仏法を覚る者にしようとの願  
いをもつておられます。ただ  
その場合、その衆生の善き縁  
をてがかりにして救うとい  
うのが阿弥陀仏以外の仏たち  
の救いの道であるといわれて  
います。たとえばその人が戒律  
を保つという善き行いをして  
いるという善き縁を手がかり  
にして救いに導こうとか、あ  
るいは經典を善く理解すると  
いう力を持つている衆生であ  
れば、經典の誦誦を縁として  
救うていこうとか、またその  
衆生が忍辱の行を行えるなら  
その行を手がかりにして悟り  
に導こうとか、あるいはその  
衆生が坐禅に力を入れてい  
るようであれば、そこを縁に悟  
りに導こうという、そういう  
ように衆生の何か善き縁を手  
がかりとして悟りへと導き育  
てていこうというのが諸仏の  
救いとお聞きしています」

A 「そういう諸仏の救いに対  
して阿弥陀仏の救いはどうい  
う特長があるのですか」

D 「それは一切衆生を平等に  
救いたいという広大な願いを  
起こして、その願いを実現す  
るために浄土を開き、一切衆

生を浄土に往生せしめんがた  
めに、法蔵菩薩は修行し、仏  
陀になられた。それゆえ一切  
衆生を浄土に生まれしめるた  
めに、衆生の側に助けるため  
の善き縁としての条件を求め  
られないのです。なぜなら善  
き縁を自ら作れる衆生は少  
なく、作れない衆生は多いか  
らです。ですから如来法蔵様  
は、衆生の側に仏になるため  
のどのような因も縁も要求せ  
ず、仏因はすべて如来法蔵様  
ご自身が仕上げ、衆生のあり  
のまま助ける仏になられた  
のです」

A 「そうすると、救われる善  
き因縁をもつている衆生を救  
おうとするのが諸仏の願い、  
救いの縁なき衆生を目標に  
一切衆生を救おうとされたの  
が阿弥陀仏の願いなのでは  
ね」

D 「ええ、それで如来法蔵様  
は諸仏に超えた広大な願い、  
いわば一切衆生を平等に往生  
せしめたいという弘誓を建て  
られたから、阿弥陀仏の願い  
を超世の願といわれるのだと  
お聞きしています」

\*

A 「この願満足せず、誓  
う、正覚を成らじ」とは」  
D 「法蔵菩薩はこの超世の願

を叶えたいと誓われたので  
す。もしこの願が実現しない  
ようなら、ご自身が仏にな  
らないとまで、それほど法蔵様  
の全分を賭して、この超世の  
願を是非とも成就したいと決  
意されたのです。その決意が  
ここに表されています」

A 「まさに法蔵菩薩のいのち  
がけの誓いなのです」  
D 「ええそうです。そして、  
この願はすでに成就して法蔵  
菩薩は阿弥陀仏になつておら  
れる、ということは私たちは、  
（今このこの身のままで浄  
土に生まれさせてくださるお  
助けが成就している）と聞か  
されるのであり、お知らせい  
ただくのです」

A 「どう知らされるのですか」  
D 「南無阿弥陀仏、南無阿弥  
陀仏と聞かされ知らされるの  
です。すなわち南無阿弥陀仏  
とお念仏の声を聞くことは、  
（汝をそのままなりで助ける、  
浄土に生まれさせる、心配す  
るな、安心してよい）と仰せ  
下さる、その大悲のお知らせ  
を聞くのであります。南無阿  
弥陀仏は私が助かる証拠なの  
です」

# 信心夜話

香樹院師曰く

「自力の願生心が他力信心の接木台の如し。遂にそれをすてて他力をたのむ信を得るなり」

『染人百話』

\*

願生心とは、浄土に生まれたいと願う心のことである。〈自力の〉というのであるから凡夫の私の側から起こす願いである。自分の側から、真面目に浄土に生まれたいという願いを起こし、修行しようとする心を自力の願生心という。

またそれに同質の心を自力の願生心と云ってよいであろう。たとえば、心が明るくなりたい、いきいきと生きたい、利己心を離れたい、怒りをなくしたい、本当の安心がほしい、救われたい、助かりたい、信心を得たい、信者になりたい、真実にであいたい、永遠に生きたい、というような、自分の中から「理想的な状態になろう」という願いを自力の願生心と云ってよいであろう。そして、こういう願いを自分の努力で、成就しようとし、実現しようと思う心、これらを自力の願生心と云ってよいであろう。ようするに、「何とかかなりたい心」「なりたいなりたいの心」である。

仏法を聞き始めるのは、この自力の願生心がまず元になる。仏法を聞いて「安

心したい」「心を晴らしたい」「信心が得たい」「助かりたい」「仏にあいたい」「自覚を得たい」という非常に切なる自分の願いがあって、初めて聞法念仏に心を寄せ、努力しようになる。いな努力せざるを得なくなる。

\*

それではこの「何とかかなりたい」「なんとかすれば何とかなる」という自力の願生心で聞法していけば、いつかは仏にであえるか、助かるかといえ、定散心まじわるが故に分離その期なし」で、いつまでたっても自力の心にとらわれて、仏にあえない。

自力の心とは自己の能力に頼り、自力の力で努力すれば結果を出せると思う自己信頼の心である。それゆえ自分をたのみに行っているから、阿弥陀仏をたのまないのである。

ところが〈なりたい〉より自力の願生心が、とうとうなることも出来ず、助かることも出来ず、いつまでも解決しない、いわばどうにもならない自分につかる。自分の力の限りを尽くしても、自分をどう変えることも出来ない壁にぶつかる。しかしその時、阿弥陀仏の「助けてやるから、タノメ」のお心がはからずも届く。仏の「助ける」という大悲は「助からぬ、どうにもなることの出来ない身」に感応道交するのである。

\*

「助からぬ身」と知り、「どうにもなれない無智無能の私」と知って、阿弥陀仏をたのむのである。だから「なりたい」「ど

うにかなりたい」「分かりたい」「信じた」「などの自力の願生心が転じて、仏心大悲が届く心となるのである。

自力の願生心が、〈我が力及ばず〉と転じ、それが本願他力の「たのめ、助ける」の大悲の仰せを受け取る土台になる。自力の願生心がまにあわなくなって、そこに他力をたのむ信心が届くのである。

その自力の「なりたいなりたい」「なるうなるう」「なれるなれる」と、自分をたのみにしている自力の願生心があればこそ、「どうにかならない無智無能、助かり難き身」と知らせていただけなのであるし、そんな私に「引き受ける」「助ける」との大悲が浸透する。

向こう岸に何とかして渡りたい、自分の力で泳いで渡れると思いい、実際に泳いでみて、初めて自分はとも泳げる奴でない」と知れる。そこに、「乗れよ、助ける」の仰せ船が唯一無二の救いになる。

向こう岸に渡りたいと願わず、泳ごうとしないものには、自分が泳げない者であるとの実感が無い。だから「この船に乗れよ、必ず向こう岸に渡してやるから」という大悲の船の有難さは分からない。いわば「助かりたい」「信じた」「悟りたい」「救われたい」という願いが起こらない人には仏のお助けが響く場所がない。

この自力の願生心は、なんとか救われたい、助かりたいと、救いをつかみにかかり、助かりにかかると、やがて、この心が〈自力無効〉と転じて、ついに如来の「助ける、引き受ける」の大悲がその心

に徹頭するのである。だから、自力の願生心が土台となり、そこに大悲の心が接ぎ木となる。

しかも振り返ってみれば、その自力の願生心が起こるのも、阿弥陀仏の光明が十方世界を照らし、光明の働きが万人を照らし続けてくださることによってである。その光明のお育てによって、「助かりたい」「救われたい」「仏にあいたい」「まことの幸せを得たい」などの願生心が凡夫の内に催してくる。であれば、この自力の願生心も、阿弥陀仏のお働き、宿善によつて起こる。それを蓮如上人は、「宿善ありがたし」と仰せられた。そうすると、仏法を聞きたい、助かりたいの心を起こさせ、仏法を聞かせ、念仏申させ、信心を回向成就し、その者を浄土に生まれさせて同じ仏にしてください、その全体が阿弥陀仏のお働きである。まことに始終丸々の他力仕立てなのである。

(了)

## 《住職雑感》

今年の八月終わりから九月の初めにかけて、北海道の四つの末寺の報恩講に出講。毎日のスケジュールはそれほどでもないが、慣れないところで法話をし、生活をする、知らず知らず緊張していて、それがたまっていたのか、我が家に帰ってくるとどつと疲れがでる。ことに腰が痛くて、立つても座っても痛くて、つい横になるほかなくなる。九月の末になつても痛みがやわらぐず整骨院に行く。腰をもんでもらった。二度ほど通つてよ

うやく痛みが少しやわらいだ。老体にな  
ってくると少々の事が体にこたえるもの  
である。しかも、この体を楽にすること  
ばかりに心がいつてしまう。老年になる  
というのは我執我愛がますますひどくな  
りえるのだと痛感する。

九月三十日。高校で文学部というクラ  
ブ活動をしていた仲間の同窓会に出  
席。男女合わせて十三名で、京都で会  
合し、宿に泊まる。四十年ぶりにあつ  
た人も何人もいた。それぞれが半生を  
語る。人それぞれの生活暦を聞き、「人  
生苦」の中で、生き抜いて来られた年  
輪を感じる。